

つなぎびと

TSUNAGI-BITO

発行 大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所
〒599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1
TEL 072-254-9783 (山野則子研究室)
eb-ssw@sw.osakafu-u.ac.jp

編集 一般社団法人「檸檬新報」
〒541-0046 大阪市中央区平野町2丁目2番9号 ビルサライ701
TEL 06-6226-5596

印刷 株式会社 日章印刷所 TEL 06-6306-0481
「つなぎびと」題字 松田 勤 / DTP 胡 遥香

「子どもの最善の利益のために」

昨年12月29日、スマートフォンのグーグルアプリで、ある言葉を検索するために画面を開いたときのことだ。そのトップ画面のニュース欄に「SSW」の文字が躍っていた。

＜スクールソーシャルワーカーの給与が、九州7県や政令市、中核市の教育委員会ですら最大3倍の格差があることが、西日本新聞の取材で分かった＞

目を奪われた理由は、記事の内容についてではない。SSWの記事が、スマートフォンのトップ画面に出たことへの驚きからだ。

（大阪で先駆的に産声を上げ、国が2008年度にSSW事業をスタートさせてから10年。ようやく「SSW」が市民権を得てきた…）

SSWのみなさんならずとも、そんな思いに包まれた。

（SSWの知名度を広げ、社会的地位を高めていかなければ、子どもの権利条約に定められた、世界共通の理念である「子どもの最善の利益」は守れない…）

そう思う人々は、確かに増えている。生命保険協会大阪府協会のみなさまも、

同じ思いに立っている。「つなぎびと」は、「SSWの啓蒙」という大阪府協会からの助成によって発刊できた。

そして、発行者は、大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所。1月17日に行われた活動報告会で、研究所・所長の山野則子さんは、「みなさんのご支援のおかげで、SSWへの理解の輪は着実に広がっています」と話した。

西日本新聞の記事は、こう続いている。

＜賞与を出す市がある一方、交通費不支給の市もあった。国は2019年度までに全国に約1万ある公立中学校区すべてにSSWを配置する計画だが、SSWの給与（多くが非常勤待遇）だけでは生活が困難な例も多く、人材確保が課題になっている＞

道は険しい。でも、新たな10年の出発点となった「2018年」をSSWのみなさんの飛躍の年にしなければならない。

そして、発展途上国の貧困にあえぐ子どもたちにも心を寄せて、教育・福祉の実践者、研究者、企業、お茶の間、メディアなど「オール社会」の「つなぐ力」で、世界中の子どもたちの未来を育む1年としたい。（「つなぎびと」取材班）



世界の子どもたち

（昨年2月 撮影・平田篤州）

ロヒンギャ難民 緊急募金

郵便局（ゆうちょ銀行）募金口座

振替口座：00190-5-31000

口座名義：公益財団法人 日本ユニセフ協会

* 通信欄に「ロヒンギャ」と明記願います。

* 窓口での振り込みの場合は、送金手数料が免除されます。

1万9,553人の善意です

一般社団法人 生命保険協会大阪府協会
会長 山ノ井 清也

今年で58回目となりました生命保険協会大阪府協会の募金活動につきまして簡単にご紹介させていただきます。

この募金活動は、昭和35年度より毎年11月の「生命保険の月」に、生命保険業界といたしまして、地域社会への感謝の気持ちを伝えるために大阪府協会地域活動として実施しているものです。

本年度も生命保険事業にかかわる大阪府下の職員1万9,553人からの募金で、

大阪府内の児童養護施設への物品の寄贈をはじめ、盲導犬ならびに福祉巡回車などを寄贈させていただきました。

加えて近年協会全体で取り組みを強化しております学校をプラットフォームとした「金融・保険教育の推進」や「子育てと仕事の両立支援」、また今年度より開始しました「保育士養成給付型奨学金制度」など未来を担う子どもたちにかかわる社会貢献活動に微力ながら取り組んでおります。

あらためまして、今回で3回目となる当助成金寄贈が、スクールソーシャルワーカーの人材育成、啓発のための「つ



（右から）生命保険協会（本部）副会長 小林研一氏、大阪府協会事務局長 平井泰造氏、大阪府協会会長 山ノ井清也氏

なぎびと」発行・活用に少しでもお役に立つ事ができればと願っております。

当協会におきましても引続き、教育現場や子どもたちを取り巻く様々な社会環境の中で活躍を期待されておりますスクールソーシャルワーカーの活動にさらに理解を深め、応援させて頂きたいと考えております。

☆「つなぎびと」は、生命保険協会大阪府協会のみなさまの浄財で発行しました。

つなぎびと

TSUNAGI-BITO

新春号

2018年1月28日(日)
特集「輝きを増すSSW」
フリーペーパー

編集：一般社団法人「檸檬新報舎」(れもんしんぽうしゃ) 発行：大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所

ひとりぼっちの子どもたち 今、社会変革の時

日本の社会を、大きく変えようとしている「うねり」がある。この国の子どもたちの悲鳴が、その背景に横たわっている。うねりは、学校を拠点にした変革の波だ。その基盤の1つに据えられるのが、SSW（スクールソーシャルワーカー）の存在である。

□ マイルストーン

昨年（2017年）3月。2008年に国がSSWを事業化してから10年の節目の年に、新たなマイルストーン（里程標）になる動きがあった。学校教育法の施行規則が一部改正されて、SSWがSC（スクールカウンセラー）とともに、初めて「学校職員」として明記されたのだ。社会変革の道しるべが、ようやく見えた、そう思えた。

□ 「今」「目の前」が大切

一方で、苦しむ子どもたちを目の当たりにして、国の動きを憂う間もなく、純粋な思いから走り出している人たちもいる。目の前の子どもたちは、「今」が大切だからだ。NPOやNGO、一般社団法人やボランティアのみなさん。実に多彩な人々が、「子どもの最善の利益」のために駆け回っている。

□ 国のカード

とはいえ、国も動いて、たくさんのカードを用意してきた。2014年の「子どもの貧困対策の推進に関する法律」、2015年の中央教育審議会の「チー

ム学校答申」、同じく2015年の「地域学校協働本部」や「コミュニティ・スクール」の概念を打ち出した中教審答申、そして同じ2015年の内閣府子どもの貧困対策会議の「学校プラットフォーム」にふれた決定などだ。

こうした動きが、昨年3月の学校教育法施行規則の一部改正につながった。

□ ジグソーパズル

国が切り出したカードを、整理しよう。子どもの貧困カード、チーム学校のカード、地域学校協働のカード、コミュニティ・スクールのカード、学校プラットフォームのカード…。そして、子ども食堂のような民間のカードも複数ある。

注目されるのは、どのカードにも、SSWが登場することだ。「つなぎびと」として、中心的な役割を担っている。

国の重い動きを「よいしょ、よいしょ」とけん引してきた1人が、大阪府立大学スクールソーシャルワーク評価支援研究所の所長、山野則子教授（写真）だ。その「SSWの旗手」が、言った。

「カードがバラバラ。ジグソーパズルのピースのようなもの。ピースを埋めて一枚の絵ができれば、学校プラットフォームがわかる。その中核となるべき専門機能はソーシャルワーク。そこから、すべての子どもたちが輝く、新しい社会が生まれるのです」

（「檸檬新報舎」編集長 平田篤州）



「シングルファーザー」の 想いを繋ぐ(10面11面)

全国で講演する清水健さん。3歳の息子のシングルファーザーとしても奮闘中だ
(大阪市中央区の清水健基金事務所=撮影・陶器浩平)

☆「つなぎびと」は、生命保険協会大阪府協会のみなさまの浄財で発行しました。

2015年12月に、内閣府の子どもの貧困対策会議が「すべての子どもの安心と希望の実現プロジェクト」を決定した。

愛称は「親と子どもたち1人ひとりのための『すくすくサポート・プロジェクト』(略称:すくサポ)。

右のようなロゴもつくられた。「すくサポ」の主な柱は、1人親家庭や多子世帯の自立の応援、児童虐待防止対策の強化だった。



□ 厳しい1人親世帯

経済的に厳しい状況の1人親家庭や多子世帯は、増加傾向にある。1988年から2011年の25年間で母子世帯は1.5倍、父子世帯は1.3倍となり、それぞれ約124万世帯、約22万世帯。母子世帯の80.6%が就業しているが、そのうち47.4%はパート・アルバイト等で、母自身の年間就労収入は平均181万円。

□ 子どもの7人に1人が貧困

子どもの貧困率は、1人当たりの手取り収入を順に並べて、真ん中になる人の金額(2015年は245万円)の半分(貧困線)に満たない世帯で暮らす子どもの割合だ。厚労省の国民生活基礎調査によると、2015年時点の子どもの貧困率は、13.9%で、前回調査(2012年)より、2.4ポイント少なくなった。しかし、子どもの7人に1人が貧困状態にあり、高止まりしている。1人親世帯の貧困率は50%を超えている。先進国では20%に満たない国が多く、日本は異常と言える。

□ 不登校・虐待・いじめ

不登校。小学校では1993年に全児童の0.17%だったが2015年には2.5倍の0.42%に。中学校でも1993年の全生徒の1.24%から2015年には2.3倍の2.83%に増えた。児童虐待は現在、1997年の20倍にあたる年間約10万件。いじめも、2013年の1.2倍の約22.5万件にのぼっている。

Prologue

なぜ、プラットフォームが「学校」なのか

すべての子どもたちの「暮らしの質(QOL)の向上」を図る。これが、みんなの願いだろう。大阪府立大学SSW評価支援研究所の山野則子さん(写真)は、内閣府や文科省の委員などを務めながら、「子どもの最善の利益」の実現をめざして、全国を飛び回っている。山野さんは、どう関わっているのだろうか。そして、どんな化学反応が起きているのだろうか。インタビューを軸にして、「輝きを増すSSW」の現実と未来を特集する。

(「つなぎびと」取材班)

最初に、山野さんが「私が抱いていた長い間の問題意識」と話す全数把握の視点を紹介する。

□ 全数把握

日本の社会は、小学校に入学する前まではすべての子どもたちの課題を発見し、対応できる仕組み(全数把握)がある。

就学前までの子どもたちは、全国の保健所が主管している「乳幼児健診」によって「全数把握」が為されている。

健診の場で、親と接して課題を発見し、地域の子育て支援センター、病院、保健所による見守り一などの方向を見据えて対応を決めている。保健所と福祉の定例検討会もあり、しっかり連携して予防的な対応も出来ている。

□ 「生活」をウォッチする

ところが、小学生になると、「全数把握」できる社会のシステムがなくなる。唯一、全数把握できる可能性を持っているのが、子どもたちが毎日通い、一日のうちで最も長い活動時間を過ごす学校現場そのもの。

だから、学校という現場こそ、課題発見から次につなぐ拠点にふさわしい。教



師の任務ではなく学校という場がプラットフォームになるというわけだ。

学校の先生はとても忙しく、子どもの学習到達度を中心に仕事回り、子どもの暮らし全体を見る余裕はない。全児童の30%は何らかの支援が必要、という調査が出ている現状があるのに、である。「生活の視点からみて初めて、子どもが抱えている『生きる力』にかかわる深刻な問題が見えるのです…」

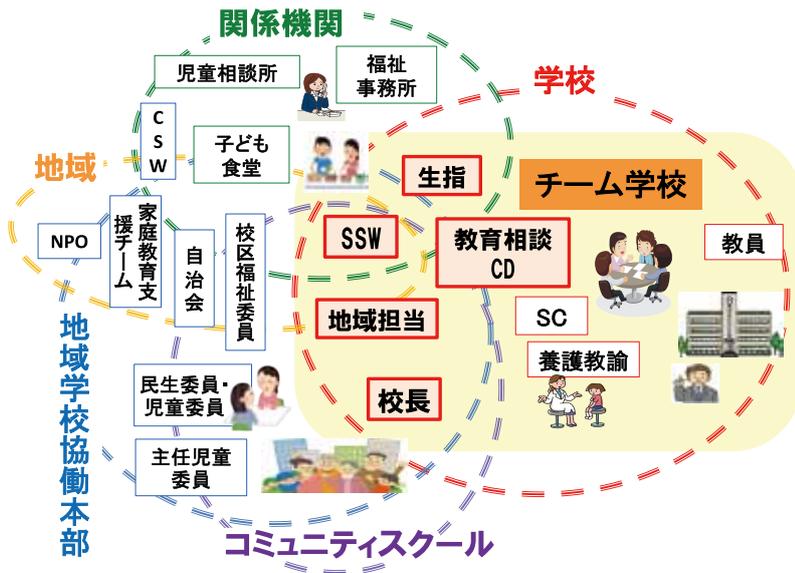
山野さんは、こう話す。

□ 一匹オオカミ

さらに、教育現場そのものが、1人で丸抱えする体制(先生1人ひとりが1匹オオカミ的存在)になっていて、縦ぐしや横ぐしをさしながらの「チーム対応」ができる組織になっていない。

「先生(教職員)だけで子どもを育み、学校運営する時代はとっくに終わっています。だから『チーム学校』の仕組みが重要であり、『地域学校協働本部』や『コミュニティ・スクール』(学校運営協議会制度の導入校)の考え方(3面メモ参照)も光り輝くのです。でも、そんな国の施策と実践は繰り返しになりますが、バラバラなのが実態。一体化して『学校プラットフォーム』という形にしていけないでしょうか」

□ すべての要にSSW



©大阪府立大学 SSW 評価支援研究所

山野さんは、さらに続けた。

「その人材として、SSW が期待されている。人々や組織をつなぐ福祉のプロの力が求められているのです。いろいろな仕組みができて、つなぐ機能がいきます。文字通りのキーパーソンとして、学校を拠点にして教育のルールと福祉のルールが合流するプラットフォームを作り、そこから新たなルールを全国に広げていければと考えています」

□ イメージ図から考える

それでは、「学校プラットフォーム」を軸にした社会の新しい構図について、山野さんが作成したイメージ図（上記）から考えよう。

学校、地域学校協働本部、コミュニティ・スクールの3つの円が重なっている。

この3つのキーワードは、いずれも中央教育審議会が文科省へ答申した内容

メモ① チーム学校

2015年12月の中央教育審議会の文科省への答申「チームとしての学校のあり方と今後の改善方策について」で示された概念。「現在配置されている教員に加えて、SSW や SC など多様な専門性を持つ職員の配置を進めるとともに、教員と専門性を持つ職員が、1つのチームとして、それぞれの専門性を生かして、連携、協働することができるよう、管理職のリーダーシップや校務のあり方、教職員の働き方の見直しを行うことが重要である」とした。

また、「チームとしての学校」が成果を上げるためには、「必要な教職員の配置と、学校や教職員のマネジメント、組織文化等の改革に一体的に取り組みねばならない」とした。

メモ② 地域学校協働本部

地域と学校が連携・協働して地域全体で未来を担う子どもたちの成長を支えていく活動を「地域学校協働活動」として積極的に推進する、としたうえで、「従来の『支援』から『連携・協働』、『個別の活動』から『総合化・ネットワーク化』をめざす新たな体制として『地域学校協働本部』を創設する」とした。

地域学校協働本部には①コーディネート機能②多様な活動（より多くの地域住民の参加）③持続的な活動の3要素が必要として、今後、協働本部が①②③を早期に全小・中学校区をカバーして構築していくとしている。

（メモ参照）の図式化である。あと2つが、児童相談所などの公的機関が属する「関係機関」の円と、自治会やNPOなどが属する「地域」の円だ。

この5つの円に描かれた中心に、「SSW」が記されている。図には表されていないが、この5つの円の福祉機関やメンバーに支えられるのが、生活困窮世帯をはじめとした支援の必要な子どもたち（2面「子どもたちの悲鳴」参照）である。もちろん、その親や関係者も支援される輪の中に入っている。子ども食堂やCSW（コミュニティー・ソーシャルワーカー）なども、いろんな円に重なる形で登場している。

そして、イメージ図に書かれてはいないが、予算をつけて「SSW 事業」を推進する国や地方自治体が縁の下の力持ちとして背後に存在する。

いずれにしても、SSW は、新しい学校、新しい地域、そして子どもたちやその家族をしっかりと守り、育てていくスキームの主人公なのである。

メモ③ コミュニティ・スクール

教育委員会が設置する「学校運営協議会制度」を導入した学校。学校と保護者や地域のみなさんがともに知恵を出し合い、それぞれが学校運営に責任を負う。学校運営に「必要な支援」も含めて意見交換する。2017年4月に改正された「地域とともにある学校づくり」を進める法律（地方教育行政の組織及び運営に関する法律第47条の6）に基づいている。

協議会の委員は、保護者代表や地域住民、地域学校協働活動推進員ら。主な役割は①校長が作成する学校運営の基本方針を承認する②学校運営に関する意見を教育委員会または校長に述べることができる③教職員の任用に関して、教育委員会規則に定める事項について、教育委員会に意見を述べる一などがある。

※メモ②とメモ③は、2015年12月の文科省への中央教育審議会答申「新しい時代の教育と地方創生の実現に向けた学校と地域の連携・協働のあり方と今後の推進方策について」の中で示された。

3つの使命に懸ける日々

学校プラットフォームを噛み砕いていくと、「子どもたちが多くの時間を過ごす学校を、教育と福祉の専門家、それに地域のみなさんがタッグを組んで拠点化し、すべての子どもたちの暮らしの課題を全数把握して、生活の質（QOL）を高めていく。それだけでなく、支えられ上手、支え上手な地域社会を創り、生活に困っている家庭の『困窮』を解消していく」ということになるのだろうか。担い手の中心となるべきは、SSW。改めて、山野さんに聞いた。

一 山野さんが、使命感をもってめざしているものは

「学校プラットフォームについて言及した内閣府の貧困対策と文科省に出された3つの答申（チームとしての学校、地域学校協働本部、コミュニティ・スクール）で示された施策を合体させることです。協働やスクールは、SSWが使える仕組みです。そのために、3つのことを進めています。1つは、国への働き掛け。もう1つは、SSWの質の向上を実現するプログラム（手だて）と全国配置の枠組みづくり。そして、もう1つが、みんなに『これは大切だ』『絶対必要だ』と納得していただけるグッドプラクティス（good practice=優れた実践）を増やしていくことです」

① 国に働き掛ける

一 何を働き掛けていくのですか

「SSWの常勤化の実現です。『教育現場に常勤配置しなければならない』と明文化することです。2017年3月に学校教育法の施行規則の一部が改正されて、第4章「小学校」の第4節「職員」の項に、SSWがSCとともに「職員」として初めて明記されました。『SSW元年』ともいえる大きな一歩でしたが、施行規則に入っただけで、学校教育法の本体には入っていません。SSWの常勤配置も、『置かねばならない』とはなっていません」

一 非常勤の仕事では、給与が少なすぎで生活できないし、目の前の課題にもじっくり向き合えない

「そうです。いくらSSWの仕事が有意義であっても、生計が維持できなければ誰も手を上げません。週に1、2回とか月に1回の仕事では、難しいです。現状では、学校プラットフォームの中心になれません」

<SSWの採用基準は、自治体で異なる。文科省が2008年度から事業化し、都道府県、政令市、中核市に人件費の3分の1を補助している。2016年度は全国で1780人が活動、2018年度予算案では7500人分を計上している。一般市町村は県から派遣・配置を受けるが人数は限られ、独自予算で採用する市町村もある。多くが非常勤の待遇で、九州を例にとると、時給は5000円から1500円とさまざま。月給制の採用は極めて少ないが、25万8200円から14万4300円と格差がある

（2017年12月 / 西日本新聞の記事）

② SSWの質の向上をはかる

施行規則の一部改正では、留意事項のなかで、SSWの職務内容も下記のようにはっきりと明記された。

<SSWはソーシャルワークの価値・知識・技術を基盤とする福祉の専門性を有するものとして、不登校、いじめや暴力行為等問題行動、子供の貧困、児童虐待等の課題を抱える児童生徒の修学支援、健全育成、自己実現を図るため、児童生徒のニーズを把握し、関係機関との連携を通じた支援を展開するとともに、保護者への支援、学校への働き掛け及び自治体の体制整備への働き掛けに従事する>

一 SSWの需要は、社会が複雑になるほど高まってくるのですね

「はい。必要とされればされるほど、SSWには、質の向上も求められます。私たちは2012年から『効果的なSSW

事業プログラム』というテーマで基礎研究を始め、2015年2月にその成果を『エビデンスに基づく効果的なスクールソーシャルワーク現場で使える教育行政との協働プログラム』（明石書店）として出版しました」

一 昨年（2017年）3月には、SSW用と教育委員会のSSW事業担当者用の小冊子も作られましたね

「事業プログラムは、事業の目標を示す『インパクト理論』、教育委員会用の『プロセス理論（組織計画）』、SSW用の『実践のプロセス理論（サービス利用計画）』に分かれています」

□ 可視化

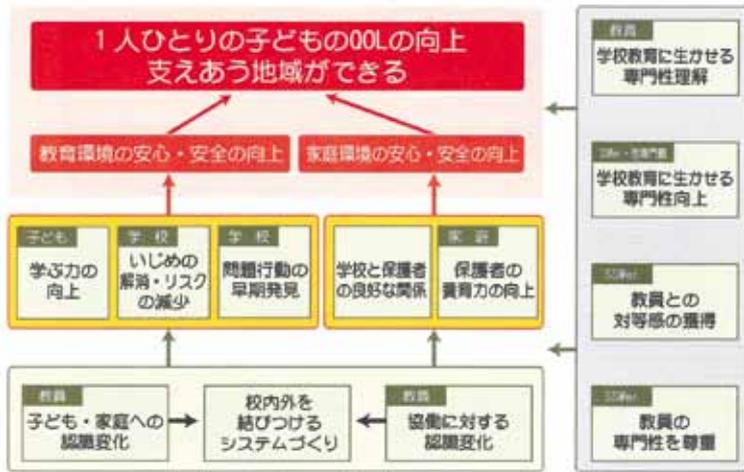
一 インパクト理論、ですか

「はい。インパクトとは、実践からもたらされるであろう一連の効果、目指すゴールのことです。SSWという職域は、まだ生まれて10数年の新領域の仕事です。1つひとつの実践と、それによる効果がしっかりと関連付けられてはいませんでした。このプログラムでは、どのような実践が効果につながるかを可視化していきます。図（5面左上）でみると、教育委員会の事業担当者による組織計画とSSWが実践するサービス利用計画によって、図の最下段の教員の子どもや家庭を見る目（認識）の変化や他の専門職との協働に対する認識の変化を生み出す→そこから子どもの学ぶ力の向上、いじめの解消、問題行動の早期発見などができて→教育環境の安心・安全の向上に結び付き→子どもの生活の質（QOL）の向上につながっていく。まさに、インパクト（衝撃）のドミノ倒し。プログラムを活用してチェックしていくと、こうしたことが可視化されるということなんです」

□ 主体者は教育委員会

一 だから、教育委員会の担当者の事業設計・運営を意識したプログラムもあるのですね

インパクト理論



© 大阪府立大学 SSW 評価支援研究所

教育委員会用

プロセス理論



「サービス利用計画」の教育委員会へのアプローチを中心としたSSWの動き

「5面右上の図に示したのが教育委員会のやるべきプロセスです。そこに私たちのプログラムの特徴があります。SSWが専門性を発揮するための環境整備には、教育委員会の主体的な関与が不可欠です。事業とは、自分たちの自治体の課題をみつめ、そこから企画・立案して予算をとり、人材を配置してスタートすることです。その事業の主体者である教育委員会の担当者のSSW事業への理解と熱意が、成否のカギです。教育委員会とセットにならないと、政策にはなりません。全体の事業プログラムの名前に『効果的な』という枕詞がついているゆえんです」

□ WEB化で全国展開

— 「効果的なSSW事業プログラム」は、WEB化されましたね

「はい。みんなができるように。北海道でも沖縄でも…。日本科学技術振興機構（JST）からいただいた補助金で『効果的なスクールソーシャルワーカー事業プログラムの実装』というテーマで研究し、WEB化を進めました」

— 技量がBランクであってもCランクであっても、WEBプログラムを使えば、Aランクの質に向上する…そんなイメージでしょうか

「そうですね」

— WEB化されたプログラムは、どのくらい普及しているのですか

「全国で67自治体、456人が活用しています。新たに2017年は長野県、北海道の中の市が参画、2018年は島根県、千葉県の中の複数市が、仲間になってくれました」

— WEBの活用と並行して、ワークショップをしていますね

「WEBの指標ポイントにチェックを入れて自分の仕事を数値的に評価するだけでは、質はあがりません。ワークショップや振り返りなどによって、関係者がいろんな意見を出し合って、仲間とともに自己評価していくのです。決して上からの評価ではありません」

— どんな形で行っているのですか

「『SSW事業プログラムあり方研究会』を組織して、全国6ブロックのSSWや教育委員会関係者に入ってもらっています。大阪府立大学で行うワークショップに、各ブロックのコアメンバーが参加。そのメンバーが現地に帰り、ファシリテーターになって地元でワークショップを行います」

— 「学び」のリレーですね。効果は、いかがですか

「WEBのチェックだけしているところと、ワークショップもしているところでは、明らかに違います。ワークショップをやることで、Bランクの人がAランクになる。評価支援研究所のネーミングの『評価支援』の意味は、プログラム（手だて）による評価をワークショップやWEBでバックアップする、といった意味もあります。成果が認められてSSWの待遇がよくなるケースも出てきました。横浜市ではSV（スーパーバイザー）が常勤になり、名古屋市ではSSWが常勤化されました。他にも参画自治体で常勤SSWが生まれていっています」

□ 実装を広げていく

— 国も関心を示していますね

「そもそも文科省のSSWガイドラインにも、プロジェクトに沿った形で掲載されました」

— 研修にも取り入れられましたね

「2016年度から、日本ソーシャルワーク教育学校連盟における研修に、プログラムを活用しています。SSWの全国1万人配置を実現するために、引き続き、全国の教育委員会や福祉現場に、プログラムの実装を拡充していきます」

③ グッドプラクティス

—山野さんが全国をかけまわって学校プラットフォームの話やSSWの常勤化を訴えると、きまって「グッドプラクティスを見せてくれ」と言われるそうですね

「毎年いわれていますよ。『グッドプラクティスを見せてくれ』と（笑）。だから、あちこちの自治体にかかわって、学校プラットフォームの実現に向けた『優れた事例』づくりを進めています」

ルポ さかい子ども食堂円卓会議

ぐんと冷え込んでいた。昨年11月22日のあさ、堺市総合福祉会館5階の大研修室に約50人が集まってきた。昨年6月に続く、第2回目のさかい子ども食堂円卓会議が始まるのだ。主催は、堺市と堺市社会福祉協議会。子ども食堂を運営する人だけでなく、子どもを想ういろんな仕事の人々が足を運んだ。

この日のテーマは、「さかい子ども食堂plusワン 食事の提供以外の子ども食堂の役割は？」だった。



円卓会議のアドバイザーは、山野則子さん。微笑みながら、淡いレモン色のセーター姿で現れた（写真上）。

今、堺市の円卓会議は、全国の注目を集め始めている。円卓会議の目的は、次のように書かれている。

<分野を横断し、各関係機関が顔を合わせ、子ども食堂の立ち上げから運営に至るまでの課題共有の場とする。地域の方々や民間機関が主体的に活動できる環境づくりを検討する。堺市内の子ども食堂の羅針盤となる >

少し砕けて言うと、子ども食堂にか



笑顔、笑顔、笑顔（円卓会議）

かわる人々が、世代や所属を越えて集まり、自由に意見を出し合い、支えあう仕組みをつくり、仲間の輪を広げて、子どもたちの最善の利益を実現していく、という井戸端会議みたいなものだ。

会議が始まってしばらくしてから、堺市社会福祉協議会・地域福祉課長の所正文さんが、カメラを手に寄ってきて、小声で話した。

「みなさん、輝くような笑顔でしょ。カメラのレンズをのぞくのが楽しみで…。確かに笑顔、笑顔、笑顔…その秘密は、なんだろう。

いろんな人が発表に立った。

「だれも助けてくれへんやろな、と覚悟して子ども食堂を始めたんやけど、見も知らん人が、手伝ったんで…と来てくれる。世の中、ほんまにあったかいわ」

そうか。笑顔の秘密の1つは、人の温もりが感じられる場だからなんだ…。

発表者の中に、市立福泉東小学校のSSWをつとめる堺市SSW、久山藍子さんの姿もあった。



SSWの久山藍子さん。毎週木曜日は福泉東小

ルポ 小学校区の子どもの食堂「つう心」

1月11日早朝。堺市西区草部にある市立福泉東小学校すぐ横の集会所。月に1度の子ども食堂「つう心」の会場。午前7時30分から始まりなのに、小学校2年生ぐらゐの男の子がきていた。

「うわあ、早いね」

久山さんの声はずんだ。

白い息を吐きながら、子どもたちが次々とやってくる。

「あっ、雪や」

少女の声があがった。本当に冷えている。寒い。そんななか、あたりは、美味しい朝餽あさげのおいにおまられる。

笑顔の子、おとなしい子…。小学1年から6年までの子どもたち約30人が、思い思いの朝食を楽しんだ。

テーブルを回って声をかけているのは、「つう心」代表の細田隆治さん。

「食堂の名前には『心を通わせる』という意味があります」

目的は、はっきりしている。早起きして朝食をしっかりとり、歯磨きをして



学校で活動している



登校前、朝ごはんに集まった子どもたち。「いただきます」



「つう心」代表の細田隆治さん



料理に腕をふるう近所の主婦や民生委員

登校する…そんな生活習慣を子どもたちに身に着けさせる、ということだ。

貫禄たっぷりの紳士がいた。福泉東小学校の校長先生、在野浩さん。

「虫歯の子も多く、歯磨きを生活習慣にすることはとても大切です。近所の歯医者さんが、ボランティアで歯磨き指導をしてくれます」

表に出た。小雪のちらつく中、食事を終えた子どもたちが「あーん」と口を開けて、歯磨きチェックを受けていた。

子ども食堂は午前8時15分まで。そこから歩いて2、3分の小学校に登校して始業に間に合わせる。

「おとし（2016年）の12月、西区役所の地下駐車場で細田さんとばったりお会いしたとき、子ども食堂の話したら、よしやろう、ということになって…そこから準備をして、SSWの久山さんに入っていたいで…昨年（2017年）5月に毎月1回のペースで始めました」

こう話したのは、社会福祉士の橋本直樹さん。堺市社会福祉協議会西区事務所の地域福祉ネットワークワーカー（CSW=

コミュニティー・ソーシャルワーカー）だ。

「子ども食堂がある日は、子どもたちは朝一番にエンジンがかかる。休み時間に寝てしまったりする子も、一日中、ずっと元気です」と橋本さん。

食事をつくっているのは、民生委員や地域の女性たち。PTAのお父さんやお母さんも、世話にきていた。

久山さんが言った。

「子ども食堂の立ち位置を、地域の中でしっかりつくるのが大切です。まず、連合自治会で『食堂をやる』と決めてもらいました。教職員が一丸となって取り組んでいます。学級通信などで子ども食堂の案内をして、その月の出欠を確認します。当日、出てきていない子のおうちには、先生が足を運びます。『生活の視点』で子どもたちを見る…地域みんなの力で実現できつつあります」

歯磨きセットは、ドラッグストアチェーンの「キリン堂」から贈られた。学校と地域が一体になった子ども食堂「つう心」は、「学校プラトホーム」に通じる、グッドプラクティスになっている。



ボランティアの歯医者さんに「アーン」



キリン堂から贈られた歯磨きセット



スリランカ
世界の子どもたち (昨年11月 撮影・平田篤州)



©大阪府立大学 SSW 評価支援研究所

＜不登校、いじめ等の未然防止、早期発見のための活動や事案が発生した際は、学校が組織として対応する必要がある。そのため、学校全体の児童生徒の状況及び支援の状況を一元的に把握し、学校内及び関係機関等との連絡調整、ケース会議の開催等児童生徒の抱える問題の解決に向けて調整役として活動する教職員を教育相談コーディネーターとして配置・指名し、教育相談コーディネーターを中心とした教育相談体制を構築する必要がある＞

学校プラットフォームの概念の中で、それが総指揮官になるのかが、見えているようで見えていなかった。校長なのか教頭なのか、SSW なのか…。この報告では、新たに設ける教育相談コーディネーターがその役割を担うことを示唆しているようにも見えるが…。

□ SSW の4つの仕事

教育相談コーディネーターとSSWの役割分担は、どうみたらいいのか。報告書では、SSWの職務内容として4つを掲げている。

(1)不登校、いじめや暴力行為等問題行動、貧困、虐待等課題を抱える児童生徒と児童生徒が置かれた環境への働き掛

け（個人＝マイクロへのアプローチ）

(2)学校内におけるチーム支援体制の構築、支援(学校組織＝メゾへのアプローチ)・複数の視点で検討できるケース会議とするための事前調整やケースのアセスメント（見立て）及び、課題解決のプランニング（手だて）への支援

(3)関係機関とのネットワークの構築、連携・調整（自治体の体制＝マクロへのアプローチ）

(4)不登校、いじめや暴力行為等問題行動、子供の貧困、虐待等を学校として認知した場合、自然災害、突発的な事件・事故が発生した際の援助

□ 輝きを増す SSW の仕事

SSW になれる資格を持つのは、社会福祉士と精神保健福祉士らだ。こうした人々の社会的地位を、医師や弁護士と同レベルにしていくという、揺るぎない胆力を国に求めたい。山野さんは言った。

「学校プラットフォームがきちんとできると、何より見落とされた子どもたちに目が向き、救えなかった子どもが救える。そして、SSWの輝きがより増していくと思います」

この社会がひとり親に厳しい 現実を身をもって知った

清水健さんに聞く

「シングルファーザーは今日も奮闘中」。こんなサブタイトルのついた本が昨年10月、小学館から出版された。メインタイトルは「笑顔のママと僕と息子の973日間」。著者は、「シミケン」の愛称でニュースキャスターを務めていた清水健さん。昨年1月末に読売テレビを退社して1年。3歳の息子のパパは、シングルファーザーのみなさんと思いをわかち合いながら、「シングルファーザーの今」を伝えている。

(「つなぎびと」取材班)

木枯らしの昨秋。大阪市中央区の谷町筋にある「清水健基金事務所」で、清水さんにお会いした。そして年明けの1月10日にもインタビューした。

— 妻の奈緒さんが旅立たれて、来月(2月)で3年になります。

「(うーん、と少し考えて)正直言うと、心の時計は止まったままです」

— 授かった男の子は、昨年10月で3歳になりました。

「(にっこり目を細めて) やんちゃなんです。3歳は、ほんと大変。頑固というか、我慢強さは奈緒に似ていますかね」

— 基金の活動はいかがですか。

「ずっと止まったままではだめだな、何かを始めないと…そんな思いから、奈緒の頑張った証として基金を立ち上げました。みなさまのおかげで、浄財も寄せられ、講演会も150回を超えています」

＜スタイリストの奈緒さんと結婚したのは2013年5月19日。2014年10月に元気な男の子を授かった。奈緒さんは112日間、「ママ」をしたあと、2015年2月11日に乳がん闘いながら29歳の



伝えたい、分かち合いたい…そんな想いで全国を巡りながら講演活動が続ける清水健さん。読売テレビの報道番組「かんさい情報ネットten」のメインキャスターだった「シミケン」は今、スタジオを抜け出して私たちの「お茶の間」にいる(撮影・陶器浩平)

若さで亡くなった。その後、「112日間のママ」(小学館刊)を出版。ベストセラーになり、印税をもとに2016年4月19日に一般社団法人「清水健基金」を設立して代表理事に。昨年1月末に読売テレビを退社して、現在は「子育て」をしながら、基金の活動に専念している>

— 基金はどんな内容ですか。

「みなさまから寄せられた浄財を基金にして、入院施設の充実、がん撲滅や難病対策などに取り組む団体や個人の事業へ寄付のかたちで『想い』を届けています。山中伸弥教授のIPS細胞の研究にも助成させていただきました。IPS細胞は、難病対策の一環として希望があるのではと。病を倒す日まで闘い続ける、という山中教授のお言葉に、すごく共感する部分がありました」

— 2冊目の「…973日間」は、いつごろから執筆されたのですか。

「出版の2か月前。昨年8月ごろです。タイトルの『973日間』は奈緒の32回目の月命日までの日数です」

— 「…973日間」では、自らの体験をもとに、シングルファーザーについての

思いを、率直に綴っていますね。

「ほんとにここまで書いていいのかな、と思いました。でも、パーセンテージで表すと少ないけど、(シングルファーザーの課題は)ほんとに多いんです。悩んでいる方、何かおかしいと思ってもグッと我慢していらっしやる方は、いっぱいいますから」

清水さんは、本の中で、キャスター時代の仕事について振り返っている。

＜シングルマザーの特集をする。その大変さは、僕も痛いほどわかる。でも本当なら僕は「シングルファーザーも同じように大変です。がんばってます」と言わなければいけないのかもしれない＞

＜あの時…「今日は子どもが熱を出したので休みます」とキャスターを休んだらどうだっただろう。今、そう思うことがある。もしかしたらそれが、僕の役目だったんじゃないか、と思う時もある＞

シングルファーザーが置かれている社会の環境についても綴っている。

＜実際、シングルファーザーは社会問題になっている。シングルファーザーの



出産か、がん治療か。健さんと奈緒さんは「3人で生きる」を選択した…ベストセラーになった「112日間のママ」(右)。昨秋、書き下ろした「笑顔のママと僕と息子の973日間」(左=定価1300円+税)。シングルファーザーとしての想いを、随所に綴っている(いずれも小学館発行)

家庭数は、1988年には約17万3000世帯。最新の数字である2011年は約22万世帯。カタチは違えど、僕と同じような方がいるのだ>

<支援体制が整っているとは言い難い。よく言われるフレックスタイムも1つだと思うが、いろんな働き方があるはずだ。…女性よりも男性のほうが稼げる、という固定観念もあるのだろう。シングルマザーへの支援もまだまだだが、シングルファーザーへの支援はそれ以上にこぼれ落ちてしまっている。シングルになって初めて、この社会がひとり親に優しくないことを身をもって知った>

— 講演を終えたあとのほうが長いそうですね。

「1時間、2時間、長い列ができます。『僕もシングルです』と泣き崩れる方もいらっしゃる。『妻が闘病中です』と泣いて話す人もいます。ぐっと我慢している人がいっぱいいる。1言2言がすごく大切に…。いろんな方の思いを受けます。感じる思いが凄いです。こんなに悲しみがあるんなら、いろんな形の悲しみがあるんなら、伝えなくちゃいけない。それが『…973日間』の本につながりました」

— 表紙の写真について

「偶然なんです。こう並べると妻が息子を抱っこしている。僕が息子を抱っこしている。背景は両方とも緑。ほんと偶然で。これでやっと『112日間…』の本の意味ができたのかな、と思います。そして、今回書かせてもらって『伝えたい』が、形になったかなと思っています」

— 確かにそうですね。2冊並べると…

「でも、悔しいですよ。3人じゃないから。3人いっしょの写真は、増えることがない。今後一生、寂しいですよ」

— 奈緒さんのこと、ママのことを息子さんにはどう伝えますか。

「何から伝えようかな、と。楽しみです、すごく…。息子はママがいないことをちゃんと理解していないと思います。こんなお母さんだったんだよ、と伝えたい。奈緒はいつも笑顔でした。その笑顔の意味を、僕なりに伝えたいと思います。それは僕の人生の中で、一番大切な仕事だと思っています」

メモ シングルファーザー

厚生労働省によると、2013年時点では父子世帯は約22万世帯。母子世帯の124万世帯に比べると少ない。

父親自身の就労収入は平均360万円。世帯では455万円。この数字は児童のいる世帯の平均年収の70%相当。約90%の父親が働いており、正規職員や自営業が70%。父子世帯の17%が死別。

父親の場合、職場でも地域でも相談する意思が希薄なうえ、相談できる環境(ネットワーク)も薄い。

そんな中、職場では理解されにくく、「別れた妻に渡してしまえ」などと言われることも。仕事上の責任を果たせなくなり、役職を辞退した例などもあり、仕事との両立での葛藤が生まれている。

また、子どもが娘の場合、「生理はいつ始まるのか」とか、「20歳までの成長の仕方がわからない」といった声がある。

メモ シングルマザー

総務省統計研究研修所の2017年10月22日の発表によると、全国のシングルマザーは106万人。離別が81万9000人で77.1%。未婚が17万7000人で16.6%。死別が6万7000人で6.3%。未婚のシングルマザーが急増しており、2010年の13万2000人から4万5000人増えている。

シングルマザーで最も多い年齢層は40歳から44歳で30万3000人。女性の生涯未婚率は2010年が10.6%だったが、2015年には14.1%にあがった。

シングルマザーのうち、85.9%が働いている。平均年収は180万円。120万円以下の貧困層に、約半数の50万人が入っている。ちなみに一般世帯の母親では48.4%が働いている。

シングルマザーの世帯で暮らす乳幼児、児童、生徒を含めて、日本の子ども(18歳未満)の7人に1人の約280万人が貧困状態のなかにいる。